

白い道

(さべつ)
しかも無間の業に生きる

第一部 法然・親鸞とその時代 (下)

三國連太郎

白い道

(さべつ)
しかも無間の業に生きる

第一部 法然・親鸞とその時代 (下)

三國連太郎

毎日新聞社

三國連太郎 (みくに れんたろう)

1923年(大正12)1月20日、群馬県の生まれ、俳優。本名・佐藤政雄。父の仕事先の移動にともない静岡県に移り県立豆陽中学入学。中学3年のとき大阪市へ行き、血洗い、ペンキ塗り、旋盤工など職業を転々、この間朝鮮・中国に行くなど放浪生活。42年12月、徴兵中支へ、漢口で終戦。50年、単身上京。同年12月、松竹大船の研究生、「善魔」の主役に抜擢される。ブルー・リボン賞とNHK映画賞の男優主演賞(60年)、毎日映画コンクールとキネマ旬報の男優主演賞(65年)など数々の賞に輝く。63年10月、日本プロを設立。67年1月、東京宝塚劇場の『明治百年』同6月『三国志』に出演。69年8月、A・P・Cを設立。75年末から親鸞の伝記映画を企画。

白い道——法然・親鸞とその時代——第1部・下 定価1000円

1982年5月15日 印刷

Printed in Japan

1982年5月30日 発行

著 者 三 國 連 太 郎

編集人 菊 地 敬 夫

発行人 関 根 望

発行所 毎 日 新 聞 社

〒100 東京都千代田区一ツ橋

〒530 大阪市北区堂島

〒802 北九州市小倉北区紺屋町

〒450 名古屋市中村区名駅

印刷・精興社／製本・大口製本

0093-400267-7904

© R. MIKUNI 1982

〔全三部作・第一部　しかも無間の業まぐわに生きる〕

白　い　道　——法然・親鸞とその時代——　下

白
い
道
△第一部
下
▽
目
次

第十三章 専修念仏

明暗分ける兼実と通親 9

教学に励む親鸞 20

法然と浄空の対話 27

在子の入内 38

朝廷に接近図る頼朝 46

第十四章 六角堂炎上

兼実の失脚と頼朝の暗殺 57

親鸞（槃宴）の蹟き 70

親鸞、六角堂に参籠 80

ちよとの邂逅 93

親鸞の開眼 107

法然の説法とちよの死

119

第十五章

一念義の人々

恵信の上洛と吉水に赴く親鸞

129

親鸞（緯空）と恵信の光と影

142

恵信（ちくせん）との問答

156

法然門下の群像

166

無間奈落の地獄

179

第十六章

念仏弾圧

黒衣の辻説法

189

一念義・多念義論争

198

七カ条起請文の真意

206

安楽らとの別れ

215

終

章

越後回顧

後鳥羽上皇の院宣

225

苛烈な現実

243

自然の法

250

僧形を棄てる

256

「結」の結成

263

「結」に投じた恵信

269

東方に仏国土を

274

後

書

281

装 幀 熊谷博人

カバー写真 吉村芳美

第十三章 専修念仏

明暗分ける兼実と通親

賀茂河畔に程近い九条邸の桜は、今を盛りと花開き、わずかな風のそよぎに花びらが池面に落ちて艶を添えていた。

慈円は庭に緋色の毛氈もうせんを敷かせ、桜を眺めながら歌を詠んでいた。だが、気がのらないのか、反古はにした詠み損じの短冊たんざくがそばに重ねられている。慈円は歌を詠むことよりも、兄兼実の出来を待っているふうであった。兼実は内覧の職から摂政へ、そして氏長者たる実権を手中にして、はや七年目であり、得意の絶頂にあった。娘任子の入内も果たし、鎌倉の頼朝とも寧静な関係を保ち、前年の建久二年（一一九一年）に、後白河法皇を呪詛じゆそした嫌疑がかけられながら巧みにこれをかわして、ついに関白の位をきわめたのである。

兼実の栄達により慈円も山門の地位を固め、平等院や法成寺執印に就任したことで摂籙家出身の僧としても、また青蓮院門跡の継承者としても当然任すべき主な寺院の要職をすべて兼ね備えていた。そして、任子の入内によって慈円は急速に宮廷との結びつきを深め、仏教界ならびに朝廷に磐石ばんじやくの地位を固めていた。

それは慈円の活動の場の変遷から如実にうかがわれる。従来、慈円の祈禱道場の多くが叡山や西山の山寺にあったのが、白川坊や平等院などの洛中外の寺坊となり、さらに九条邸に依拠しながら

院内の御所で修法するようになっていた。そこには、かつて隠遁すると言って兄兼実を手こずらせた慈円の面影は微塵も感じとれなかった。既に兼実は四十三歳、慈円は三十七歳になっていた。

「わしも一首詠んでみようかの」

快活に声をかけて兼実が庭に降り立った。慈円は筆と短冊を脇に置いたが、振り返って会釈さえしようとしなかった。

「どういたした。機嫌ななめか？」

「ようもそのように笑うておられるもの。今日は兄御前に苦言を呈しにまいった」

「はて……苦言と」

慈円の怨みがましい様子に兼実はとぼけてみせたが、慈円の胸の裡はわかっていた。

「慈円という弟を持ちながら、賤陋な民に阿る法然が如き輩から受戒なされるとは。いったいかなるご了簡におわされるか」

「はは、言うてまいると思った……」

「これは僻みで申し上げておるものではありません。一念往生などと、妖しい体の解釈を加えて、新しい時代を生き抜こうなどとは、まさしく天台の開祖最澄に叛逆する何ものでもありませんぞ。はたまた教義や修行は雑行ときめつけるなどは、仏法を根本に否定するもの。わたしも若い頃には仏法の世俗化に反発して、隠遁して聖にでもなろうと思ったことはありませんが、法然が如き者のもとに集まる聖はもとと下賤……。あの者たちは先験の要素を教えに組み入れようとせず、世直しなぞと嘘を基底に言葉に責任を持たない俗物の集団です。敵です。元兇です。排除すべき輩なのです」

慈円は語氣を強めて法然に近づこうとする兄をたしなめた。兼実が法然を招いてはじめて受戒したのは、三年前の文治五年（一一八九年）八月一日であった。兼実の『玉葉』には「今日、法然房の聖人を請き、法文語及び往生業を談ず」とあり、同月八日には「法然聖人來りて受戒、其後念仏を始む」と記されている。兼実は前の年に望みを託していた嫡男良通の頓死に遇い、娘任子の入内が叶わなければ出家しようとさえ悲痛な決意をしていた。任子の入内聴許の院宣を賜ったものの、先行きの不安にさいなまれていた時期でもあったのだ。権力の座にある者は、絶えず不安に脅かされ、その不安を取り除くためにと確たる保証をいたずらに追求する。だが、その保証を手に攔むと、また新たな不安に戦慄する。兼実もその例に漏れなかった。兼実は任子入内を実現させるために、祈禱にも専心し、多くの僧や寺院に依嘱していた。巷で評判の高かった法然が招かれたのも、その頃であった。

その後、兼実はしばしば法然を招いて受戒しているが、その主な目的は受戒によって法然から宿痼の病氣・邪氣の治療とその効驗を期待したからであった。兼実が法然から受戒したのは主に七月から十月といった夏から秋口にかけてが多く、はなはだしい緊張感からの疲労による多発性神経炎の症状とも思われる風病や、その他の持病の発生が集中的に現われたのである。法然は専修念仏の唱導者というよりは、東寺の仏敝や筑紫医僧の大善房、賢障房、知康法師などといった僧医と同じように兼実に招かれて受戒をさすけたのである。

慈円はそのことを知りながらも、天台のあり方を否定するような浄土教の唱導者と闘白である兄が接触することは、貴族の体面としても許しがたいものがあった。

「この慈円が法然とは立場を異にしているのは百もご承知のはず。それなのに、法然から受戒なされているとは……。巷の物笑いですぞ」

「そのように怒るな。わしとてそなたの立場は良う存じておる。だがの、慈円。わしにはわしの考えがあつてのこと」

「兄御前のお身体のこととは良う存じております。邪氣の治療のためなら、ほかにも人がありましようものを……」

「法然が専修念仏を称える者だから、そなたの癩にさわっておるのだろうが、法然はなかなか医術に長けた者。医僧の分に徹してわしに受戒いたしておる」

「しかし……」

「心配いたすな。山門にはそなたがおり、東大寺はわしの意のままになる重源、興福寺には信円と兼実、玄季、仁和寺には信助を配して宗教界に睨みとなっておろうが。市井に名高い法然の動静をさぐる目論見もあるのじゃ。そのような者も拒まず招しているのはわしの度量……。地位ある者は些細なことにこだわらぬものじゃ」

兼実は慈円の狹量を論すように笑って言った。信円は兼実らとは異母兄弟にあたる興福寺別当であり、覚乗と玄季は兼実の正妻で良通、良経の母の兄弟にあたる人物である。また、仁和寺の信助は兼実らの実母加賀局の兄弟で高野山にも往来した真言僧である。興福寺の覚乗、玄季、仁和寺の信助、それに山門の慈円は、兼実が宗教界に張りめぐらせた人物の中で、最も信頼すべき者たちであつた。

「しかし、内裏まで法然を招じたことは、世人の誇りの的になっておりますぞ」

「それもこれも、すべては我ら一門のためと申うてのことだ」

「一門のためと言わしやるか」

「さよう。中宮任子のご懐妊と皇子出産を祈念するため。なにせ任子はもう十八、後鳥羽帝はもう十三歳であらせられる。手を打っておかねば遅れをとるからの」

兼実 は法然に受胎の方法を問うたところ、法然はよどみなく、その博識を披瀝した。

「医書の『病源論』によりますれば、一つには墳墓を嗣がざる者、二つには夫婦の年齢相剋する者、三つには夫婦に病患ある者には子宝に恵まれずとあります。しかし、帝も中宮もまだお若くいらっ

しゃいます。今から『千金方』にあります処方方を施せば不妊ということはありますまい。帝には五味、牡荊、車前子など二十四味からなる七子散を、中宮には天門冬、当帰、芍薬などの二十六味からなる紫石門冬丸を酒と共にご服用めされれば、摂政殿の思いは杞憂に終わることでしょう」

兼実 は法然の明快な施療を聞くと、早速、法然を参内させて中宮任子に受戒させたのであった。それは前年の建久二年（一一九一年）九月二十九日のことであつた。だが慈円にしてみれば、山門から離れて勝手に専修念仏など称える身分の低い僧の参内にも腹立たしいものがあつた。

その当時の法然はその効験のためか兼実に請われるままに、受戒をさずけていたが、吉水に訪れる人々には専修念仏の教説のみを説き続けていたのである。

「人間は宿業のもとで受けた病は、いかなる諸々の仏神に祈るとも、それで病が癒えるわけではないのです。祈ることで病が治り、命が永らえることができれば、誰ひとりとして病み死ぬ人はいな

いでしよう。だが、念仏を信じる人は、たとえどのような病に罹ろうとも、これみな宿業と思ひ、これ以上に重い病になるところを仏の御力によって救われていることを知るでしよう」

兼実や中宮に受戒する法然と、吉水に結縁けつえんを求めて集まる愚痴無智の尼入道と、慈円から蔑称された庶民に対する法然とは、どこか相入れぬものがあるように思われる。だが、政治と宗教の関係は何か、という普遍の命題があるように、法然の心中に苦渋があったかもしれないが、法然という人間像を全体として考える場合、それは矛盾というよりも法然の体質志向そのままの発現であつたろう。だが、こうした法然の体質は、のちに教義上では内部に一念・多念の対立を生み、南都北嶺との妥協を認める動きにつながり、法然歿後に分派した浄土宗各教団の権力迎合の体質へと引き継がれるのである。

しかし、当時は念仏のみによって誰もが救われるという法然の教えは、砂地に染みる水のように多くの民衆の心を掴み、兼実をはじめ権門貴種にまでも浸透したのである。兼実の政敵である源通親の猶子で、のちに西山義の祖となった証空なども若くして法然の門を叩いたひとりであつた。法然の法力、評判は次第に高まっていたのであつた。

兼実は咲き誇る桜を見上げながら論きとすように弟に言った。

「慈円。世の流れを読み違あやどごうてはならぬ。法然房こそ新しい時代が必要としておる聖かもしれぬ。侮れぬぞ」

「しかし、兄御前……」

「すべては知恵だ。知恵を使うて力を蓄えることだ。そう法然に目くじらを立てることもあるまい。